

昭和五十五年度

大谷学会春季公開講演会要旨

古代バクトリア地域における

クシャン文化の研究について

国立民族学
博物館教授

加藤 九祚

近年、ソ連の考古学界では古代バクトリアの地域における考古学的調査がさかに行なわれています。

まず、バクトリアとはどんなところであるか、簡単にのべておきたいと思います。

一、繁栄の地バクトリア

中央アジアの大河アムダリヤの中・上流部兩岸一帯は、紀元前からバクトリアという名称で知られていました。これは、今のソ連領ウズベク共和国とタジク共和国の南部およびアフガニスタン北部の地域です。

バクトリアの地では、アケメネス朝の成立前五〇〇年頃（紀元前二〇〇〇年頃）からオアシスが栄えていました。バクトリアの東方山岳地帯バダフシヤンからは、西アジア方面で珍重された濃い空色の石、ラピス・ラズリが採取されました。前三〇〇〇年期以後、この石でつくられた印章や装飾品はメソポタミア、インド、ペルシア湾岸、中央アジアの砂漠などで発見されています。前十四世紀のエジプトのファラオ、ツタンカーメンの墓からは、見事なラピス・ラズリの装飾品が発見されました。バクトリアの富に

ついては、古代ギリシヤ人もよく知っていました。ヘロドトスはその著『歴史』の中で、アケメネス朝のキュロス王の征服活動にふれ、バクトリアを古代世界最大の王国であるエジプトやバビロンと同列に置いています。ギリシヤの著作家アポロドトスは、バクトリアを「全アリアナの飾り」と呼んでいます。アリアナというのはアリア人の住地のことです。ゾロアスター教の創始者ゾロアスターの保護者は、伝統的なバクトリア王カヴィ・ヴィスタンニブであったと伝えられます。

バクトリアは、アレクサンダー大王の遠征においても重要な位置を占めています。大王の率いるギリシア軍がバクトリアに侵入、これを征服したとき、大王自らバクトリアの太守オクシアルトの娘ロクサーナと結婚しました。この史実も、古代アジアにおけるバクトリアの重要性と無関係ではないと言えましょう。

一八八〇年、約一八〇点の金銀宝物と一、五〇〇点の古銭からなる有名なオクサス遺宝（前五一二世紀）が偶然にイギリス軍将校の掌中に入り、今でも大英博物館に収蔵されています。この出土地点は今でも正確には謎とされていますが、いずれにしてもバクトリアの地であることは確かです。

ところで、古代バクトリアの中心はバクトラと呼ばれたが、それは今のバルフであると考えられています。バクトラは、アレクサンダー大王死後のセレウコス朝から独立したグレコ・バクトリア王国（前二五五年頃）の中心となりました。二〇世紀になって、世界の考古学者たちは、繁栄したバクトリアの首都バクトラの発掘調査を夢見、アフガニスタン政府から調査の権利を得ようと争いました。そして、一九二二年ついにフランスが独占的権利を獲得し、ガンダーラ美術の最高権威アルフレッド・フーシエを団長

とする調査団によってバルフの遺跡が発掘されました。しかし期待は裏切られました。フォーシェは自らの失望感を「バクトリアの幻影」という言葉であらわしましたが、これは今でも考古学史上よく使われています。しかしフランス考古学の伝統はアフガニスタン北部、バクトリア付近のクシャーン時代神殿址スルフ・コタール、グレコ・バクトリアの都市遺跡アイ・ハヌムなどの発掘によって実を結んでいます。

グレコ・バクトリア王国は紀元前二世紀の後半、クシャーン(貴霜)と呼ばれる北方からの遊牧民族によって滅ぼされました。『後漢書』西域伝によると、族長の名は丘就卻(クシャーン貨幣に出てくるクジュラ・カドフィセスと同じ人物とされている)。クシャーンはまずバクトリアの地に足場を築き、紀元一世紀中頃から二世紀にかけて急速に興隆し、ヒンドウクシュを越えてインドに領土を広げました。二世紀中頃、クジュラから三代目のカニシカ王の治世のとき、仏教および仏教美術が中央アジアを経由して中国に伝えられたことはよく知られています。

二、バクトリア地域の考古学的調査

このバクトリアの阿姆ダリヤ両岸地域で近年目ざましい発掘調査が行なわれていますが、とくにクシャーン時代に属するものとして、右岸地域のハルチャヤン、ダルベルジン、カラテペ、ファヤズ・テペなどが注目されます。いずれもテルメズ付近と阿姆ダリヤ右支流のスルハンダリヤ川岸です。ハルチャヤンは、発掘者プガチェニコフによれば、クシャーン朝のごく初期の、例えばクシャーン貨幣に出てくるヘラエス一族のものであろうと考えられています。ここからは多数の彫刻、数点の壁画断片が発見されました。ダルベルジンの方は、仏教小寺院や一般住宅区域、貴族の住宅区域な

どのある六五〇×五〇〇メートルの都城址です。またカラテペとファヤズ・テペはいずれも仏教遺跡ですが、前者は中央アジア唯一の洞窟式寺院であり、後者からは、中央アジアを通じて最も見事な石灰岩の仏像が発見されました。これらの遺跡については、私の小著『中央アジア遺跡の旅』(日本放送出版会、昭和五四年刊)に概観してあります。

つぎに左岸地域では、ここ二〇年来、スルフ・コタールやアイ・ハヌムなどフランスの考古学調査団によって大発掘がなされましたが、十年ほど前からのソ連・アフガン共同調査団の活躍が目立っています。私はここで、主としてこのことについて紹介したいと思います。ここではディルベルジン・テペとティリヤ・テペの二つに限りましょう。

(1) まずディルベルジン・テペですが、これはバルフの北北西約四〇キロのニチカ部落付近にあり、グレコ、バクトリア時代から五―六世紀までの文化層をふくむ都城址であります。ここからの発見物として最も注目されるのは、わりあい保存のよい壁画と彫刻であって、モチーフとしてはギリシア神話(双生児神ディオスクロイ)、インド神話(シヴァとパールヴァティ)、仏教関係のものがみられます。

ディルベルジン・テペ遺跡の構えは、高さ六一七メートルの方形の防壁にとりかこまれ、その中央に高さ二〇メートルの内城(ツイタデリ)の跡が残っていました。防壁は厚さ三―五メートル、大きき三八二―三九三メートル、かつてはそれに十二ないし十四個の塔がそびえていました。内城は一五〇メートル四方でした。この都城址のプランが正しい方形であることは、中国の都城との関連においてとくに注目されます(樋口隆康教授の指摘によ

る)。

この遺跡からはクシャン時代の仏教の小寺院址も発掘されました。一つの部屋からは、手の掌を上にして、右手を左手の上においた *yoga-munda* の状態の仏坐像が発見されたが、残存部分の大きさは四五センチ、幅八〇センチ、ほぼ等身大と思われました。仏または菩薩の像は、頭部や足の破片から考えて、第二号室だけで少なくとも六体を数えることが明らかになっています。

ディルベルジン・テベの発掘調査報告は、「古代バクトリア」*Drevnyaya Baktria* と題して第一集(一九七六年)、第二集(一九七九年)にロシア語で刊行されています。

(2) ティリヤ・テベの発掘(シバルガン遺宝)

一九七八年の晩秋、バクトリアの地のシバルガン付近から、クシャン王国の形成期のもと考えられる一大宝物群が発見されました。そしてこの場合も、他の大きな大発見と同じように、かなり偶然的要素を伴っていました。

一九六九年秋、バクトリアの古代史研究を目的としたソ連・アフガニスタン考古学調査団が結成され、アムダリヤとヒンドウクシュ山脈との間の広大なバクトリア平原の各地で大規模な発掘が始まりました。その重点はムルガブ川、ダリヤイ・サフエド川、バルフ川の三つのオアシスに置かれ、ダリヤイ・サフエド川流域の、今のシバルガン市の近くでは、グレコ・バクトリア時代以後の古典古代遺跡エムシユ・テベが選ばれました。これは面積約一八ヘクタールの円形をなし、強力な防壁の跡もある立派なものでした。

エムシユ・テベの付近にはいくつもの小さな天然の丘が散在していました。考古学者たちはエムシユ・テベから三〇〇〜四〇〇

メートルほど離れたティリヤ・テベ「黄金の丘」と呼ばれる丘の表面から、手づくねの彩文土器の破片を見つけました。これはイランや南トルクメンではそれまでに多数発見されましたが、アフガニスタン北部では未発見のものでした。調査団はこの丘を試掘することにしました。その結果、この丘の第一層は、高い日干煉瓦の土台の上に築かれた豪華な広間のある神殿址であることがわかり、その全貌を知るために発掘面積はさらに広げられました。連日、一〇〇人以上の労務者が動員されました。

このようなある日、ひとりの労務者のシャルベルは全く偶然に、金銀製品のある一つの墓につきあたったのです。墓には、約三、〇〇〇点の金銀寶石が埋められていましたが、しかもそれが六基次々に見つかったのです。全部で二万点にのぼります。死者は衣服や身体の各部分を金銀製品で飾っていましたが、布地はもはや腐敗して、金属製の宝物だけが無秩序な堆積になっていました。衣服には、一、〇〇〇個の金の飾板、ボタン、花卉型の飾り、下げ飾り、ビーズなどが縫いつけられていました。布地そのものも金糸と数百個の真珠で刺繍され、複雑な植物文様を形成していました。一番多いのは、葡萄の蔓に葉が芽生えている図文でした。この墓が王族のものであることは明らかでした。被葬者の頭の上には黄金の冠がありました。特に注目されたのは、金の薄板を様式化された樹木の形に切って、五つのパールメット(忍冬文様)にまとめた冠でした。その枝には鳥が止まっていました。金冠はすべて真珠とトルコ玉によって象眼されていました。死者の頭は金銀の器の上に安置されていたが、その一つの金器にはギリシヤ文字の銘文が刻まれていました。

黄金の下げ飾りの中では、二つの馬頭形のものが特に注目され

ました。そのたてがみにはリヤビス・ラズリとトルコ石がはめ込まれていました。人間の形をした二個の大型下げ飾りでは、人物の両側に空想的な有翼のドラゴンが立っていました。下げ飾りはトルコ石と紅肉玉髓によって豊かに飾られていました。

高浮雕の形で動物闘争の光景の描かれた短剣の黄金の鞘は、目を奪うほどのものでした。有翼のグリフォン（怪鳥）、口ばし状の鼻をしたドラゴン、ネコ科の猛獣などが長い鎖の形につながって、そのそれぞれが自らの牙を、その前を行く動物の尻につぎたてています。そして面白いことに、この恐しい光景は短剣の柄へ移行し、突然、葡萄蔓を食べている熊の姿で終わっています。この墓地からは五個の金貨が発見されました。一つは、これまで未発見のインド金貨、二つめはローマの貨幣で、紀元一六年から紀元二一年までの間に铸造されたものでした。あとの三個はいずれもバルティアと関連のあるものでした。これらの金貨は、明らかに前一世紀から紀元一世紀の年代を示しています。

また黄金の留金の戦士像は、グレコ・マケドニア、バルティア、クシャンなどとの関連を示しています。シカを型とった腕輪は北方の遊牧民の世界、金製バンドの円形飾板の女神像はギリシアとバルティア、首飾りはクシャン初期のタキシラ発見のものにつな

がっています（『アサヒグラフ』一九七九・六・一号参照）。

ティリヤ・テベ丘の六つの墓は、発掘者サリアニディ博士によれば、ティリヤ・テベ遺跡そのものの時代とは無関係で、三〇〇メートル離れたエムシュ・テベと結びついているものでした。「エムシュ・テベを居城とした古典古代期の現地支配者が、はるか以前に廃墟になっていた丘を一族の墓地として選び、それが後代にティリヤ・テベと呼ばれるようになったと考えられる」とサリアニディは書いています。

ところで、この墓の豪華げんな副葬品に比べて、墓のつくりは不釣合なほど簡素でした。墓は何の装飾もない小さな穴で、夜間でも一、二時間で構築できる程度のものでありました。地表には何の目印もなかった。つまり、埋葬は夜間ひそかに行われ、そのために盗掘を免れ、今日に伝えられたと考えられます。墓は、墳丘が豪壮であればあるほど確実に盗掘されていると言えましょう。この遺宝の研究はこれからの仕事で、クシャン王国の成立期の謎が明らかにされるものと期待されています。

（尚、講演の原題は「ソ連領中央アジアにおける仏教遺跡調査について」であった。）